

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価(事業所記入)	外部評価(評価機関記入)	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	前年度の仕事ぶりから、利用者様に対して思い起こされることや、職員の信念を添えた目標が毎年度作られ、毎日朝礼で唱和している。法人理念は職員一人ひとりの意識付けになっている。	法人理念、ホーム独自の今年度の活動目標については玄関、各ユニットに掲示し、来訪者にも支援の取り組み姿勢を明確にしている。合わせて日々の朝礼時に唱和をし共有と実践に繋げている。職員は法人理念の持つ意味を理解して日々の業務に取り組んでおり、特に新人職員に対しては仕事の進め方、利用者に対する寄り添い方について管理者より個人指導すると共に、基本に立ち返る意味から職員会議の席上全職員で話し合いの場を持ち、理念に沿った支援をしている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自身が地域の一員として日常的に交流している	コロナ禍で外出や交流の機会が減ってしまったが、地域の方から野菜のおすそ分けや、使わないタオル、衣類等の寄付をして頂いている。運転マナーについての情報共有もしている。	開設以来地域の人々との交流を深め地域の一員として文化祭等の行事への参加や地域の小学校、保育園との交流活動等に積極的に取り組んで来たが、昨年春以降新型コロナウイルスの影響を受け全ての活動が中止になり残念な状況が続いている。コロナ終息後にはまた行事への積極的参加や地域ボランティアの受け入れ等地域に密着し開かれた施設として活動する予定である。そのような中、今年度8月に短大生の介護実習の受け入れが行われており若い介護職員の育成に力を入れ取り組んでいる。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	認知症見守り協力団体すまいるに登録している。コロナ禍で難しい面もあるが、認知症カフェ等の活動等、認知症になっても暮らしやすい町作りを目指している。学生さんの実習は断ることなく受け入れている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実践、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	コロナ感染拡大防止のため、町とも相談、連絡を取り運営推進会議は開催していない。	家族代表、区長、民生委員、町福祉課職員、ホーム関係者の出席で2ヶ月に1回奇数月に開催していたが、昨年春以降新型コロナウイルスの影響を受け、町役場と相談し中止の状況が続いている。現在地域の参加メンバーとの関係継続を図るべく方策を検討中である。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	コロナ禍でメールやWEB会議等、連絡の形は変化してきたが、事業所連絡会、認定調査、コロナ感染予防物品の受け取り、ワクチン接種の対応等、連携を取っている。	町福祉課とは「コロナ対策」「ワクチン接種」「事故報告」等、必要に応じて電話やメールで連携を取っている。また、事業所連絡会もWEB会議で開催され、制度改革等についての話し合いが行われている。介護認定更新調査は調査員がホームに来訪し行われている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護保険法指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	玄関は防犯のため施錠している。コロナ感染拡大防止のため、人との接触の機会を減らす目的から各棟の入り口も施錠し、棟を超えた交流は控えている。”感染から命を守るため”にすべきことと、”倫理に反すること”を混同しないようにしている。	法人の方針として拘束のない支援に取り組んでいる。入居して間もない利用者が帰宅願望が強いが、時折家族に窓越しでの面会をお願いしたり新型コロナウイルス感染の話をして納得して頂いている。玄関は安全確保のため施錠されている。また、転倒危惧のある方がいるが家族と相談し足元センサーを用い安全の確保に努めている。現在はコロナの影響を受けユニット間の移動は出来ないようになってきているがきめ細かな所在確認を行い事故のないよう心掛けている。年2回身体拘束の勉強会を行い自己チェック表を用い振り返りの機会を持ち、言葉も含め拘束への意識を高め支援に取り組んでいる。	

グループホームわかな

自己	外部	項目	自己評価(事業所記入)	外部評価(評価機関記入)	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	年に2回以上の勉強会を開催し、共通認識を持ち、虐待防止に努めている。また、認知症の理解を深め、利用者様が同じことを聞いてきても、職員は気持ちよく答えるようにしている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	法人内の研修資料を基に、読み合わせをして学ぶ機会を設けている。実際に成年後見人制度を活用し、司法書士行政書士の先生に関わって頂いた利用者様のケースもあった。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	改訂時は事前に文書でも周知し、納得して頂けるように努めている。契約時等も利用者様、ご家族ともに納得の上で利用開始できるように、返事は急かさずお待ちし、意向を尊重するようにしている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	重要事項説明書に苦情や相談担当窓口者名を明示したり、玄関にご意見箱を設置し受け付けている。担当者だけではなく、全職員が利用者様、ご家族の声を受け止め、共有するようにしている。	殆どの利用者は職員の問い掛けに対し意思表示の出来る状況であるが、難しい状況にある方もおり表情や仕草から要望を受け止めるよう努めている。家族の面会については8月1日よりコロナの警戒レベルが上がり自粛状態となり、現在は5～10分間位の窓越し面会か事前予約を頂いてのWEB面会を行っている。一昨年、初めて町の温泉施設を利用し一泊の家族会を行い喜ばれた。コロナの影響を受け2回目の開催ができていないが、収束後には実現したいと考えている。そのような中、利用者の様子は1～2ヶ月に1回発行される写真入りお便り「ほのほのだより」でお知らせし、利用者一人ひとりの様子は毎月管理者より手書きのお便りでお知らせして喜ばれている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	毎月開催している職員会議等で、意見や提案ができる場を設けている。大勢の中で言いにくいことや、疑問点、不安点も個別に管理者に報告、相談してくれる職員が多い。	月1回全体での職員会議を行い事前に募集した検討事項の話し合い、連絡事項、業務改善等の話し合いを行いサービスの向上に繋げている。目標管理制度があり、職員は年間目標を設定し年2回自己評価を行い管理者による個人面談が行われ働き方改革に合わせ個々のスキルアップに繋げている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	働き方に関しては、個々の年齢や健康状態、家庭環境等の現状と希望とを考慮して、働きやすい職場を目指している。法人の目標管理シートを活用し、自ら目標を掲げて意欲的に働ける心構えを作り出せるようにしている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	初任者研修、実務者研修、喀痰吸引等研修の他、学びたいことに挑戦できるように、職員間でも応援する風土ができてきた。日々の業務の中でも、互いに教え合い、育て合う関係性ができてきた。		

自己	外部	項目	自己評価(事業所記入)	外部評価(評価機関記入)	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	研修や会議での出会いを通じ、情報交換や共有につなげている。コロナ禍で変化してきた情報のやり取りを活かし、オンライン研修等の参加も増えてきている。		
II.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	ご本人の言動をこまめに記録し、職員間で共有している。生活歴や趣味、不安点、望む暮らし等、職員から声をおかけし、安心して生活できるように居場所づくりに努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	利用申込時、入居時等、その都度ご家族や居宅のケアマネジャー、相談員等の関係者と情報交換、共有することで、理解や信頼関係の構築に繋げている。”してほしいこと”、”してほしくないこと”は必ずお聞きしている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	利用申込時から実際の入居までには時間がかかってしまうため、実際は入居を見送るケースが多い。決断されるまでは待ち、ご本人やご家族にとっての「その時」でなければ今必要な支援に繋げている。		
18		○本人と共に過ごししえあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	ご本人ができる家事や作業を手伝って頂く等、職員が利用者様に助けられていると感じる場面が日常的に多々ある。利用者様は役に立った満足感を得て、共に支え合う家族のような関係である。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	必要物品の購入や受診の対応、手紙や電話でのやりとり等、繋がりが切れてしまわないように努めている。今後のご家族間の絆を守るためご家族からお伝えすべきと思われることは、職員が間に入らないようにしている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	コロナ感染拡大防止のため、面会制限されてしまうことが多いが、密越し面会やWEB面会、電話や手紙、広報誌等で生活の様子をお伝えしたり、繋がりが途切れないように努めている。	通常であれば、友人、知人の来訪があるが、現在は新型コロナの影響を受け自粛状態が続いており、収束後には再開予定である。ホームの電話や手紙で家族とやり取りをされている方が数名いる。また、暑中見舞いのハガキや手作り年賀状を職員のお手伝いをいただき作成し家族に発送されている方も数名いる。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに関わり合い、支え合えるような支援に努めている	共有部分での交流だけでなく、お互いの居室に招き入れ、仲良く語り合う利用者様もいる。職員は利用者様同士の相性を見ながら、橋渡し役をしたり、フォローに入る等、行っている。		

自己	外部	項目	自己評価(事業所記入)	外部評価(評価機関記入)	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退所後の手続きの際に、その後の様子や状況をお聞きして、お話しする機会を設けている。病院に移った利用者様のご家族からは、その後の経過報告を兼ねたハガキを頂いたこともある。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	日常生活やご本人との会話の中から、生活の中での楽しみ、困りごとをお聞きし、記録に記載したり振り返りで共有している。利用者様の生活歴、ご家族、関係者からの情報を基に、利用者様が望むだろう人生を、最期まで考えている。	殆どの利用者が意思表示の出来る状態で、朝の洋服選び、好きな飲み物選び、好きな食べ物、入浴はいつ入るか等、全て提案して選んでいただき意向に沿えるよう取り組んでいる。居室内や入浴時など1対1で話しをする時間を大切に、気づいたことは生活記録に纏め、業務に入る前に確認し支援に取り組んでいる。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	ご自宅での生活や趣味、ご家族との関係性、入居までのいきさつ等をじっくりとお聞きしながら、ご本人の思いの理解に繋げている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	食事が摂れたか、排便はあるか、睡眠は足りているか、ここまで介助すればあとはできる、こんなリズムで過ごせると良い等、気分良く、安心して過ごせるようにご本人の状態把握に努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	利用者様の状況や困りごとを話し合い、成功例の共有や知恵を出し合っている。会議の場以外でも、日々の振り返りや職員同士のさりげない会話の中で良いアイデアが出ることもある。	月1回行われるカンファレンスの中で意見を出し合い管理者が3名ずつモニタリングを行っている。家族の希望は入所時や面会時にお聞きし管理者と計画作成担当者がプラン作成に繋げ、入居時は仮のプランを作成し様子を見て、3ヶ月のプラン作成に繋げている。長期目標6ヶ月で設定し、3ヶ月毎に確認と見直しを行い、状態に変化が見られた時には随時の見直しを行い、利用者一人ひとりに合った支援に繋げている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	食事、排泄、睡眠状態から見てくるもの、表情や言動から読み取れるサインを見逃さないようにし、その日の過ごし方に反映させている。気づきから生まれた工夫を実践し、記録に残す→介護計画に活かす、という流れができています。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	コロナ禍での職員による無料のヘアカット、緊急受診時に高齢や移手段のないご家族との協力体制等、小規模少人数だからこその対応が定着してきている。		

グループホームわかな

自己	外部	項目	自己評価(事業所記入)	外部評価(評価機関記入)	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	コロナ禍ではあるが、行きつけの美容室、歯科医院、ご近所さん等、長年のお付き合いにより支え合っている関係性を継続できるように努めている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	グループホームに入居したらかかりつけ医を変更する、ということはない。重度化により通院が困難になった場合は、訪問診療が可能な病院に紹介してもらおう等の支援もしている。	入居時に医療機関についての希望を聞いている。現在、入居前からのかかりつけ医の受診対応の方が三分の一弱で家族対応となっており、入居前からのかかりつけ医の往診対応の方が若干名、ほか半数以上の方はホーム協力医の月1回の往診で対応している。また、併設の老人介護保健施設の看護師が週1回来訪し、利用者の健康管理と合わせ医師との連携がオンコールで取られている。歯科については必要に応じ家族にかかりつけ医への同行をお願いしたり、往診をしていただいている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	最低でも週2回は様子を見に来てくれる看護師に、利用者様の情報や気づきを報告し助言を受けている。受診等が必要な場合は関係機関と連絡を取りながら対応している。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	救急搬送や緊急受診の際は職員も必ず同行し、医療機関に情報提供等の必要な対応をしている。入院中、退院時にも必要に応じて面会の機会を設けてもらう等、相互に安心できる関係づくりに努めている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所のできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	経口摂取が難しくなった、発熱を繰り返す、介護施設で行える処置の限界が来た等、その都度早めにご本人、ご家族の意向を確認するようにし、できる限り望む最期を迎えられるようにしている。	重度化、終末期に対する指針があり利用契約時に説明している。終末期に到った時には家族、医師、看護師、ホームで話し合いの機会を持ち、医師の指示の下、家族の意向を確認し改めて同意書にサインを頂き看取り支援に取り組んでいる。開設以来20数名の看取り支援を行い、全職員気持ちを一つにし取り組み、家族より感謝の言葉を頂いている。現在、コロナ禍という状況が続いているが、看取りに際しては家族に面会していただき最期の時を共に過ごしていただくようにしている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	法人内研修センターの備品、救急蘇生シミュレーター、AEDトレーナーを使用し、職員全員が訓練している。また、喀痰吸引等研修を1名ずつではあるが受講し、実践できる体制を目指している。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	火災、地震を想定した訓練、情報伝達訓練を定期的実施している。消防署、設備業者、法人内危機管理室参与の協力、指導を受けながら、いざという時に備えている。	6月と11月の年2回消防署への届け出を行い防災会社の協力も得て夜間想定と火災想定避難訓練を行っている。合わせて「水消火器を使つての消火訓練」「火の元確認、建物確認」「防災機器の点検」等を行っている。また、8月には地震想定避難訓練を行う予定であり、災害時の動きの流れ、緊急連絡網の確認等を行う予定である。備蓄は「水」「お米」「レトルト食品」等3日分が準備されている。	

自己	外部	項目	自己評価(事業所記入)	外部評価(評価機関記入)	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	利用者様の性格に合わせた声かけや、排泄ケア時にドアを閉める、バルタオル等で隠す、羞恥心に配慮する、申し送りの方法等、利用者様の尊厳を保持するよう意識している。	丁寧な言葉遣いに心掛け、方言も交えながら親しみを込め接するようになっている。トイレ介助には特に気配りをし、丁寧な声掛けに心掛け周りにわからないようにお誘いしている。また、利用者一人ひとりの情報は他の利用者の前では話さないように徹底している。また、入室の際にはノックと声掛けを忘れずに、声かけは希望に合わせ「苗字」か「名前」を「さん付」でお呼びしている。更に、年1回プライバシー保護の勉強会を行い意識を高め取り組んでいる。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	ご本人の嫌がることはしない、介助前に声かけ説明をして承諾を頂く、ご本人の分かる言葉でお伝えする、どちらか選べるようにする、意向の確認を行う等、自己決定できるようにしている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	施設のスケジュールや都合を押し付けない、時間に追われないよう、ご本人の気持ちを大事にしている。その日の気分、一人ひとりのペースに合わせることで、利用者様の安心感や信頼関係の構築に繋がっている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	ご本人のお気に入りのアクセサリーや腕時計、帽子を身に付けて頂いたり、今日着る服の選択に付き添い自己表現してもらえよう支援している。定期的なカットや整容で清潔保持に努めている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	献立にリクエストがないかお聞きしている。利用者様が食事作り、盛り付け、後片付けに積極的に参加し、嬉しそうにやりがいを持っている。お誕生日や季節行事等、特別メニューが楽しめるように準備している。	半数の方が自立しており、他の方が一部介助という状況である。新型コロナ前は職員も共に食事を摂っていたが現在は別室で摂るようにしている。献立はその日の職員が冷蔵庫の食材を確認し考え、調理し提供している。利用者のお手伝いは力量に合わせ野菜の下処理、盛り付け、食器洗い等に参加していただいている。外食が難しい状況が続いているが、誕生日、母の日、父の日、お正月等には利用者の希望を聞き季節の料理を楽しみ、土用の丑の日には「鰻」、また、時折、利用者の好きな「お寿司」をテイクアウトし楽しいひと時を過ごしている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	利用者様の体調や病気、好みに応じて、献立内容や食形態を工夫している。お好きなもの、食べられるものを、食べられる時に、食べられる量で提供することが、栄養摂取や水分確保に繋がっている。		

グループホームわかな

自己	外部	項目	自己評価(事業所記入)	外部評価(評価機関記入)	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	ご本人が嫌がらない限り、利用者様に合わせた方法で口腔ケアを行っている。嫌がられた際も、時間をあけて再度お誘いする、関わる職員を代える等の工夫をしている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	「トイレ」、「便所」等、利用者様が理解しやすい表示をしたり、転倒リスクが高い利用者様にはベッド横にポータブルトイレを準備している。排泄の感覚が来た時や一人ひとりのパターンに合わせて、さりげなく声をおかけしている。	一部介助の方が半数強で、他の方は全介助という状況である。排泄表を用い一人ひとりのパターンを記録に残し、起床時、おやつ前、食事前、就寝前等の定時の声掛けと、合わせて利用者一人ひとりのパターンに合わせてトイレにお連れするようにしている。また、排便促進を進めるよう、スポーツドリンク、甘酒、お茶等、水分摂取目標を1日1,000ccとしスムーズな排泄に繋げている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	水分補給や乳製品、寒天、食物繊維等、便秘に良い食材を取り入れたり、体を動かす機会を作り出すようにしている。腸閉塞を繰り返す利用者様に対しては、下剤の服用や浣腸等、病院からの指示を守るようにしている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	入浴を拒みがちな時間帯を避けて、声かけのタイミングを計っている。2~3回お誘いしたり、ご本人が「入りたい」とその気になった時に気持ちよく入浴して頂けるよう、職員同士も連携を図っている。	一部介助の方が半数強で、全介助の方が半数弱という状況である。週2回の入浴を行い、入浴時間30分を目安に気持ち良く入浴していただくよう取り組んでいる。入浴拒否の方が数名いるが職員を変えたり、時間を変え対応している。入浴後は好きな飲み物、スポーツドリンク、乳酸飲料等を準備し楽しんでいただいている。入浴剤を使用し、季節により「ゆず湯」「菖蒲湯」「みかん湯」等も行い季節感を感じていただいている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々の状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	1~2日眠れない日が続く、食後に熟睡する、日中人の気配を感じながらの方が眠れる...等、一人ひとりが安心して眠れる条件を把握し、それを整えられるように努めている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	1度処方してもらったまま見直しができない薬はないか等、往診や飲み終わる時期に合わせて、主治医や看護師に相談している。気になる症状が薬の副作用によるものではないかという視点も、忘れないように心がけている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	食事作りや後片付け、洗濯物たたみ等、自宅で当たり前に行ってきた家事を得意とする女性利用者様が多い。男性利用者様は女性利用者様の話の聞き役、テレビの番人、晩酌を楽しむ等、今までの暮らしの継続ができるようにしている。		

グループホームわかな

自己	外部	項目	自己評価(事業所記入)	外部評価(評価機関記入)	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	コロナ禍で外出は制限されているが、またご家族と外出できる希望を持ち続けられるような声かけや関わりを意識している。施設周辺の散歩、中庭でのマレットゴルフ等、できる範囲で楽しめることを支援しようと職員は努力している。	外出時、自力歩行の方が半数弱、車いす使用の方がほぼ半数という状況である。天気の良い日にはホームの周りを散歩したり中庭に作ったマレットゴルフ場でプレーし楽しんだりしている。また、毎年、秋には紅葉で有名な箕輪ダム「もみじ湖」まで紅葉狩りを兼ねドライブを楽しんでいるという。また、春には近隣の「桜」の花見をしながら散歩したり、夏場には近所のバラ園にも見学に出掛け楽しいひと時を過ごしている。現在は外出が難しい状況が続いているがコロナ収束後にはまた計画を立てて外出レクリエーションを行う予定である。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	コロナ禍でお金を使う機会はほとんどない。お金の心配をされる利用者様には、職員やご家族から説明し、不安を取り除けるようにしている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	ご希望があれば、ご家族と毎日電話で話をして頂いている。携帯電話をお持ちの利用者様には、充電から、受信、発信操作のお手伝いをしていた。手紙や年賀状のお返事が書けるように準備し支援している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	季節に合わせた飾りや作品、写真、草花を展示して楽しめるようにしている。一方で、紛らわしいものは置かない、利用者様を混乱させない環境作りも意識している。	清掃が行き届いた玄関を入ると季節の飾り付けが迎えてくれる。ゆったりとした広さが確保されたホールは天井が高く開放感に溢れている。そのような中、ソファーに腰掛けテレビを見たり会話をを楽しむ利用者がある。壁には日々の活動の様子を撮影した写真や利用者の作品が数多く飾られ、活動の様子を窺うことができた。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	ソファーの配置を工夫して個別になれる空間を作ったり、窓際に椅子を置き一休みできる場所にしたり、一人ひとりが居心地良いと感じられる場所で、自由に過ごせるように努めている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	ご自宅で布団を敷いて寝ていた方は布団、夫婦でお揃いのベッドを購入したばかりだった方はそのベッドを運び入れて頂く、位牌や遺影、離れて暮らすご家族の写真、花嫁道具のタンス、思い出のあるぬいぐるみ等、“私の部屋”を作っている。	各居室には洗面台、大きなクローゼットが設けられ暮らし易い造りとなっている。清掃が行き届き匂いもなく清潔感が漂っている。持ち込みは自由で、自宅で使われていたタンスやテレビ、イス等が持ち込まれ、壁には家族の写真や自分の作品が飾られ思い思いの生活を送っていることが窺えた。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	利用者様が理解できるような表示をするようにしている。感染防止や離脱、事故防止のために危険な場所は職員が管理しつつ、それ以外の部分では「できる」「わかる」に繋がる工夫を心がけている。		